

超低出生体重児への1歳からの育児支援

埼玉県立小児医療センター神経科
奈良隆寛

【要旨】研究班の方針に沿って超低出生体重児のための早期介入の外来を運営している。我々の早期介入の特徴は①超低出生体重児を対象にした②1歳から早期介入を開始し2年間でコースを終了する③保母や臨床心理士だけでなく各種の職種がスタッフとして入っている④母親のフリートーキングの時間を設けた⑤外来として診療報酬をとっていることである。

【見出し語】超低出生体重児、早期介入、育児支援

【諸言】周産期医療の進歩に伴って、超低出生体重児の救命率は上昇し、そのこども達が幼稚園や小学校に通う時代になった。このこども達が幼稚園や小学校で受け入れられるには、幼児期における集団生活への導入が大きなポイントとなる。超低出生体重児は就学近くまで体格は小さく発達もゆっくりである。母親は育児の上で何らかの不安を抱えたまま、児の入園や入学を迎えることが多い。我々は超低出生体重児を持った母親がどのようにこどもを受けとめ、集団生活の中にどのようにこどもをいれていくかを評価し、1歳台から早期に介入することによって、育児を援助し発達を促進する外来「すくすく外来」を開設し、4年間たった。他の施設では対象を2歳移行の極低出生体重児としていたのに、我センターでは1歳台の超低出生体重児を対象としていたのが特徴であった。前研究班の中でいち早く1歳台のこども達をみていた先駆者として、1歳台からの早期介入について論ずる。

【対象と方法】当センターにおいて、未熟児新生児病棟を退院後のフォローアップは未熟児新生児科と神経科の外来で行っており、発達は津守稲毛式発達質問紙・遠城寺式発達検査・新版K式発達検査で評価している。「すくすく外来」の対象は超低出生体重児で出生した児で4月の時点で修正13か月から24か月の幼児を選び、かれらに2年間継続して参加してもらった。したがって、対象は修正36か月までとなり、クラスの中に24か月弱の年齢差をもつこども達が存在した。脳性麻痺などの神経学的合併症を持たない児を選んだ。平成8年度クラスの構成は男児8名と女児12名で、平均在胎週数は26.8週で、平均出生体重は 788 ± 154 gである。こどもたちの居住地は南は足立区から北は久喜市まで、当センターから40kmの距離がもっとも遠

方であった。

「すくすく外来」のスタッフは神経科と未熟児新生児科の医師・外来と未熟児病棟の看護婦・理学療法士・作業療法士・栄養士・言語療法士・臨床心理士・歯科衛生士・保母の20名から構成され、地域の保健婦にも声をかけ、参加してもらっている。

年5回、2年間を1クールとして、350m²の広さの講堂で午後2時から4時までの2時間で行なっている。児には自由遊びを保母の誘導のもとにもらい、母には毎回ひとつのテーマでスタッフが講演し、この講演の後でみんなでおやつを食べながら、看護婦が中心になってフリートーキングを行なう。また、連絡帳を会の始めに提出してもらい、終了までに質問事項にスタッフが回答を記載した。各年度の最後の外来において、母親にアンケートを書いてもらい次年度の外来の参考にした。

【結果】22名の対象のうち、1年生6名は毎回出席し、2年生16名のうち毎回出席した者は5名で、4回が6名、3回が3名であった。また、1年生であった平成7年度に毎回出席していた2名は、2年生になった8年度に1回も出席しなかった。この2名について母親に電話で欠席の理由を聞くと、ひとりとは転居のため、もうひとりとは姉が学校に行くようになり時間がとれないということであった。

フリートーキングの際には、活発な討論がくりひろげられ、内容によって理学療法士や栄養士や臨床心理士がグループの中に入り、疑問点に答えた。1年生の母親からは「発達が遅い」という不安があげられたところ、2年生の母親から「3歳までに少しめどがたってくる。2歳半ころにはふつうの子たちに追いつきそうな気配がみえてくる」というコメントが得られた。

こどもたちは最初の外来から保母の誘導によって母親から離れて遊んでいられ、母親は講師の講演を落ち着いて徴候できた。1年生（1歳台）のときはまだみんなとは遊べないが、2年生の後半（3歳になるころ）には少し仲間で遊べるようになってくる。

【考察】早期介入の外来として我センターでは1歳台からの超低出生体重児を対象とし、幼稚園年少組に入園する前までの2年間を1コースとしたため、すべてのこどもは開始後3か月以内に歩くのは可能となり、広いスペースを有効に使えた。母親の不安なことは言語の発達やしつけの問題であった。1年生の母親は2年生のこどもたちをみることで、超低出生体重児の発達がゆっくりしていることを知ることができているのが、我々の方式の一番の長所である。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



【要旨】研究班の方針に沿って超低出生体重児のための早期介入の外来を運営している。我々の早期介入の特徴は(1)超低出生体重児を対象にした(2)1歳から早期介入を開始し2年間でコースを終了する(3)保母や臨床心理士だけでなく各種の職種がスタッフとして入っている(4)母親のフリーターキングの時間を設けた(5)外来として診療報酬をとっていることである。